

4, バビロニア編

・・・最初薄明るかった画面が、光り輝くように光線を放った。

(明るい!・・・)

暫くの間、画面を正視出来ずにいた・・・。

徐々に目が慣れてくると、南国らしい景色が輪郭を現わし始めた。

突然!私の意識は、目の前の世界を認識した。

(ここは、常夏の国だ!)

太陽は強烈に照りつけ、左右に広大なテラスが広がり、美しい花々がその中に咲いている。画面自体が段々と熱を帯びてきたのでないかと思う位の強い日差しである。

赤い花をかんざしにした美しい女性が、徐々に大写しになった。

私の眼前にその女性が立っているのである。

「エバ、この空中庭園に咲く花々も、君の前には影が薄い・・・日の光も君の美しさを称えている様だ・・・」

「まあ!ジョン様、でも、私以外の女性にもそうおっしゃっているのではありませんか?」

彼女は、少し拗ねるように言った。

「君に逢った時から私の心は決まったのだ。私は、君を愛する定めにあるのだ。」

彼女は、喜びの表情を見せながら、黙してそれ以上語らなかつた。

(彼女に語っている男性の姿が見えない・・・彼女と直接会話をしているかの様だ・・・

まるで、私自身が主人公になったみたいだ。これはどういう事だろうか?)

声だけが、後ろから聞こえてくるのである。

ここでアミーが言った。

「観察者が主人公になるように、画面を調整したのです。彼女と話している男性は、バビロニアのネブカドネザル王の近衛兵長です。当地ではかなり有名な男性で、名誉も力も有る存在です。」

(そうか・・・彼は今、女性に愛を語っているのか・・・)

「夕日が綺麗な頃に、あの船に揺られながら愛の続きを語り合おうではないか・・・」

彼女は、じっとこちらを見ながら、こう言った。

「早くこの仕事を終わらせなくては・・・」

そう言って花々の手入れを始めた。

「では、今夕あの船で逢おう・・・」

と彼は言って、テラスの端に有る階段を順繰りと下って行った。

地上で語り合っているのかと思っていたら、下を見ると、ここは驚くほどの高所である。

この空中庭園は、幅が40m×奥行き10m位の庭園を4m位の高さに順繰り階段状

に7段積み上げた形に成っていた。

語らいの場所は一番上の7階だったのだ。

高度が30メートル程もあるこの場所から、見える範囲をぐるりと見渡してみたら、この庭園は、とてつもなく広いお城の内部に建てられていたのである。

この庭園の最上階から、彼は愛を語っていたのである。

このお城は、縦三百 μ ×横二百 μ 位の広大なもので、遙か向こうのお城の右側の縁は、非常に大きな川に接している様に思われた。河の豊かな流れが、遠くから眼下に流れ来るのが見えた。

有り難い事に、ここで画面がぐるりと回転された。

アミーが私のために特別サービスしてくれたのだ。

お城の右壁は、10 μ 程の高さと幅を持つ防護壁と接しており、右の防護壁の向こう側を見ると、又々巨大なお城が二つ存在している。これらのお城も三百 μ ×二百 μ 位の大きさがある様に思えた。

じっくり見ると、二つの城の手前に巨大な門が見えて来た。

そしてそれ以外の場所に、次々と大きな神殿が見えて来た・・・。

四分の三ほど回転した時に、高く巨大な建造物が目に入った。

何段もの階層が上に連なり、100 μ 近い高さにある頂上の青色の礼拝所を支えていた。

(何の材料で造られているのだろうか?)

私はここに来てから初めて、建造物は何で出来ているかに思いを馳せたのだった。(綺麗に彩色された細かいものが一面に目に入っていたが、目の前のテラスを見ると、煉瓦で出来ている・・・この巨大都市は全てが煉瓦で出来ているのか?・・・これ程の巨大建造物ばかり煉瓦で組み立てるとは・・・)

街の外壁の長さは、3km四方くらいあるように思われた。一番向こう側は、霞んで見えないくらいである。

巨大な物ばかりに目を奪われていたが、手前に目を遣ると、河の支流が右から左に流れ、船着き場が左下方にあるのである。

その船着き場に、日除けの藁制ドーム付の船が見える。これは、日本の屋形船に相当する物だろう。

この船に揺られながら、愛を語り合うのだろうか。

私は内心、惑々してきたが、そう思ってから些か後ろめたく感じた。

何せアミー氏は私の心がかなり読める様なのだ。

(こういう時は、心を読まれると有り難くない・・・都合の良い時も有るが・・・)

普通の三次元画面でも相当な臨場感があるのに、更に今度は、自分が直接会話するような一体感を感じるのである。

今は、ネブカドネザル王の時代である。

彼は空中庭園を下り地上に降り立つと、この城内の様々な門を通り、幅が70メートルもある東の庭を通過して、本通りと思われる大きな通りに出た。200メートルの長さを持つお城の美しい黄色の壁を左側に置き、正面を見た。墨壁がピカピカと青色に光り、道の左右に広がっている。

正面には、絢爛たる巨大門が立っている。門を通る人々の何と小さく見える事か！。門の左右には、高さが13メートルも有る黄色の城壁が何キロにも渡って続いているのである。

大通りの右側にある神殿も凄い。

白色の神殿は、50メートル以上の幅を持っている。

彼は道の反対側へ行き、北側に有る先程の空中庭園を・・・つまり彼女の方を眺めた。その頂上は、10メートル位の高さを持つ南城の壁から更に20メートル近く上に聳えている。

そこには、あらゆる灌木と花々が咲き誇っているのである。

上方に目をやったまま、彼は後ろを振り向いた。

1kmほど南方には、100メートル近い高さの塔が聳えている。

見る角度が異なると、また違った感慨が湧いてくる。

全体が赤みを帯びたその塔の頂上には、神の御所の様に青色の神殿が霞んで見える。それだけでは無い、ここには、人が望む全てが有るのである。

彼は大通りを始め色々な通りをあちこち歩き始めた。

そうすると、平民も軍人も多くの者が驚きながらもうやうやしく私の方に挨拶をするのである。

通りには、様々な商家、酒場、工場、占いや魔術師の館、果ては、金細工通りや職工通りまである。

道々には、様々な国から来た人々が沢山いたのである。

中には、貧乏人の倅と思われる人物が、キョロキョロ辺りを見回しながら歩いているのに出くわしたりした。

かれは、一山当てようとして大都会にやって来たのだろう。

この町には、50万から60万の人々が住んでいるのではないか。

通り通り毎に、必ず白い神殿がある。

その数は、街全体で数十にのぼるだろう。

やがて、歩き回って一服したくなった彼は、果物屋はないかと周りを見渡した。様々な果物を店の前の棚に並べた小さな八百屋が目に入った。早速その前に行き、色々な果物を眺め始めた。

ナツメヤシ、ザクロ、イチジク、梨、そして何種類かの葡萄もある。

八百屋の主人の眉間に意識を集中すると、

「どこそこの平定以来、葡萄の入荷が多くなった・・・」

云々言っているようだ。

近衛兵長は1枚の銀貨を取り出すと、釣りはいいからナツメヤシと葡萄を少しくれと言った。

店の主人は、店に入った時から驚きの表情で彼を見ていた。

(それは無理もないか・・・彼はネブカドネザル王直属の近衛兵長という事なのだから・・・)

彼の地位を考えると、こんな買い物は奉公人か奴隷の仕事である。

街を歩くにしても数人の使用人や部下を連れて歩くのが普通の筈だ。

そうすると、店の主人は二重の驚きを味わっている事になる。

恐縮している主人を横目に、彼は煉瓦で作った低い椅子に腰を降ろすと、水分たっぷりの甘いナツメヤシの実と葡萄で喉を潤し始めた。

(ここは果物が豊富だ・・・バビロンは甘いナツメヤシのよう・・・そうやって皆がここに集まるのだ。)

彼の眉間に意識を集中した時、確かにこんな事を考えた様だ。

少しして、隣の家の看板を見上げると、楔形文字が書かれており、この文字の看板は、どこか別の場所でも目にした様に思われた。

内部を覗くと、お金を貸したり両替したりする人々で可なり混雑している。(カウンターの向こうに居る人々はバビロニア人とは違う・・・何人だろうか?・・・ユダヤ人だろうか・・・)

ナツメヤシと葡萄で一段落した彼は、この通りの西側、つまりユーフラテス河の方へゆっくり歩き始めた。

前方に少し歩くと、先程の巨大で高い塔が見え始めた。

凄まじい量感を感じながら、やっとそこを通り過ぎると、200程前方には、庭園の上からは見えなかった壮麗な神殿が姿を現わした。

彼は歩く速さを少し早めた・・・。

やがて門が見えてきたが、門の左右に屈強そうな兵士達がずらりと並んでおり、一般人は誰も中に入れない様である。この宮殿は、王侯貴族しか入れないのではないか。彼が一言発すると、兵士達はぎくっとして、胸の前で武器ごと腕をクロスに持ち上げたまま、不動の姿勢に成った。

私が命じた訳では無いが、自分がそうした様な気分になって、私は・・・実際には彼は内部に入場していった・・・。

内部に入ると、通路は緩い下りの半地下状に造られており、その幅は7～8程で長さは80程あった。

その長い通路は美しい大理石で出来ており、壁には宝石が至る所にちりばめてあった。

不思議と灯りは見当らなかつたが、内部は精妙な光りにより見通す事が出来、突き当

たりの正面の部屋は、更に明るく光り輝くようだった。

通路の20ほおき位に左右への通路があり、その通路は碁盤の目状に美しく出来上がっていた。

通路にある何方かの部屋を彼が覗くと、様々な神の礼拝所に成っており、美しい壁石に宝石がちりばめられ、魔除けの小型の獅子や小型の鬼の様な人形が置かれてあった。

その他、手足のたくましい人物の彫刻や、珍しい置物が多くあった。

正面の部屋に徐々に近づくにつれ、その部屋は主神の部屋ではないかと私は感じた。

とうとう、彼はその部屋の内部に入って行った。

その中は部屋というより宮殿の中の宮殿というほうが相応しく、右手奥にある主神の座は、金で覆われており、壁には大小の様々な宝石が夜空のように散りばめられていた。

主神の左右には、炉の油の灯りがゆらゆらと立ち上っていた。

その内部の明るさは、その灯りに勝っており、そして精妙であった。

(どこから外部の光を取り込んでいるのだろうか?)

左手を見ると、王の座と立像があり、どちらも金張りであった。

彼は王の座の方へ歩いて行き、手前を左へ曲がった。

そこにはやや小さな部屋があり、木製金張りの彫刻品の様な王の寝台が眼に入った。金ぴかの小型ダンス、やはり金張りの電話台に似た物、三段引き出しの家具等があり、この部屋にある物全てが金で覆われていた。

その神殿の壮麗さは、都で随一ではないかと思われた。

「この神殿は、王がソロモンの神殿を観た時、その壮麗さに心奪われて、それと同等か、或いはそれ以上の物を造りたいと願って造られたものなのです・・・今の年代は、バビロンの捕囚が行われた少し後の時代です・・・」

此処へ来て初めて、アミーの説明が入った。

彼は、小物入れの方に歩いて行き、三段ある引き出しの真ん中を迷わずスーと開くと、小さな青色の半球の石が嵌め込まれた金の指輪を取り出すと、自分の小指に嵌めた。

(彼の目的は此れだったのか・・・あの美人への贈り物か・・・王が今は居ないのを知ってここへ遣って来た訳だ。)

彼は元来た道をどんどん戻って行った・・・。

先ほどの入り口の門へ出ると、兵士達は同じ様に腕を胸へ持ち上げた。

彼は一言何かを言ったが、「ご苦労さん」とでも言ったのだろう。

左手の方へ彼は進んで行ったが、200ほ程彼方には橋が見えた。

十字街を二つ過ぎると、向こうに人々が群がっているのが見え始めた。

近寄るに連れ、癖のあるバビロニア語が聞こえてきた。

バビロニア市民以外にユダヤ人も大勢いるようだ。

聴衆に隠れて姿は見えないが、喋っているのは指導者らしい人物の様だ。皆、熱心に聴いている。

近衛兵長が「エゼキエル・・・」とつぶやいた。

(?・・・何処かで聞いたことがある名前だが・・・)

ここで近衛兵長が聞き耳を立てたので、私は誰だったかを思い出すことより、話の内容に意識を集中した。

・・・段々話の内容の意味が表れてきた。

(・・・神に背いたイスラエルの民は、神により他国に散らされたのだ。虜囚の地で真の神に目覚めた我々は、やがて又祖国イスラエルを再興するのだ・・・エルサレムは破壊されつくした。我らに対する神の怒りは、漸く終わりを告げようとしている。貧民が犠牲になり富める者が益々富み栄える戦も終わった。やがて、バビロンの偶像も瓦礫のように砕かれる日がやって来る・・・そなた達は、真の神は誰かを知らねばならない・・・)

これを聞き近衛兵長が怒りを露にするかと思いきや、深刻に考え込んでいるので、彼の心の中も探ってみたくなった。

彼の心は、複雑だった。

(エゼキエルの知識の源は、バビロニアの神々からのものではない・・・)

彼の予言は、外れた事が無い・・・これは一体どういう事なのか?・・・王も私達もある種の恐れを懐いている事は確かだ。ユダヤ人に演説の自由を与えるという慈悲が、バビロンの破滅を予言される事になるとは・・・この都の平安は、永遠に続く筈なのだ。今を見るがよい!

この繁栄ぶりを! 奴隷でさえ楽しげな皆の生活ぶりを!・・・)

漸く日が陰り始めた時、彼は今夕のスケジュールを思い出した。

(ユーフラテス河からニヌルタ門へ抜ける何時ものパターンは少し飽きた・・・今夕は、塁壁の外側まで出て、外堀の運河を巡るコースにしよう。あそこは、郊外の運河へ出ることも出来る・・・なにせ彼女は本命なのだ・・・)

私は思った。

(昼間、彼女が語った儀礼的疑惑の言葉は、儀礼ではなく本心から言ったのだろうか?・・・彼の核心を正しく突いていたのだろうか?)

或いは・・・彼は本当に彼女を唯一と思っているのだろうか?)

軍人の彼はここで、何人かの女性の事を考え始めた。

(イシュタール門の門前に立つ案内嬢はユダヤ人だ。初めて見たのは、こないだのユダヤ遠征の時だった・・・ユダヤの僧侶の娘とか言っていたが、イスラエルで見た時から私は心に留めていた。一か月の道中、何度も労いの言葉を掛けながら、在る夜、私のテントに引き入れた・・・)

ランプの光の中で彼女をしげしげと観たが、カルデア人には無い色の白さ可憐な美しさを持っている・・・敬虔なユダヤ神の信奉者である彼女は、心を開こうとはしなかった。彼女はこう言った。・・・貴方の武勇と思いやりには尊敬の念を禁じえません。でも、真の愛の無い行為を神はお許しにはならないでしょう・・・

誰に向かって口を聞いているのかと一瞬、むっとしたが、何故か逆に愛おしくなつて、こう切り返した。

・・・ユダヤの神は、あなた方を試されると聞いた。そして、その通りになったのだ・・・私は、神の教えによるあなた方を試す者なのだ。そして、バビロンにてあなた方を支えよう・・・貴方が、信仰を守り通せるように・・・。もう一人は、防衛城にいる召使だ・・・郊外居住地の中から選りすぐって連れて来たのだ・・・)

ここでアミーの説明が入った。

「彼が今住む南城の外側は、南以外三方が河に面しているので暑さを凌ぐには格好の場所です。そして彼の寝室は北面にあり、夜になると、月光が淡く差し込み静かな雰囲気生まれる良い場所なのです。」

私は再び彼の思考に意識を集中した。

(・・・あの時も月明かりだった・・・彼女の部屋へ侵入しようと急に思い立った・・・部屋を出てから家族の在室を通り過ぎ、広間、武人の部屋、召使の部屋と渡って、やっと彼女の部屋にたどり着いた。なかなかスリルを感じる小旅行だった・・・ドアのカギは、やはり掛かっていた・・・

合鍵を取り出すと、音をたてぬ様にそっとドアを開いた・・・窓の傍の寝室で寝ていた彼女の顔を月光が淡く照らし、美しい顔が普段の美しさとはまた異なった神秘的な雰囲気を醸し出していた・・・

わたしは、魅入られた様に近づいて行った・・・私の僅かな気配に促されたのか、寝返りをうちながら目を開けた。その驚いた顔ったら・・・)

やがて、彼は多分自宅と思われる城へ帰るため、すっかり日の暮れたバビロン市内を歩き始めた。

500程東へ歩いて行くと、行列通りが近づいてきた。

(いつ見ても何という華やかさ！これを見る異邦人も再びここを訪れざるを得なくなるのだ・・・)

その時私は、バビロンへ来てから最も美しいものを見た気がした。

ランプの街燈の明かりに浮かび上がる壮麗な通りが見えてきたのである。それは近づくとつれ、彼方まで続いている事が判り、長さは1km以上あるのではないか・・・。

彼は、毎日がお祭りの様なこの通りを進んで行った・・・。

(そういえば、今晚の船の出発地は、防衛城前の運河からだともずい、召使のテタナにまともに視られてしまう・・・主城前のユーフラテス河からにしよう。エバを連れてイシュタル門を通る時はもっと大変だ、ユダヤ人のナオミにまともに視られてしま

う。彼女は敬虔過ぎる女性だ・・・そのせいで、仕事を装い下女を伴ったり、部下を引き連れたりして通っている・・・500程も遠回りして、シン門を通った事もあった・・・

それにしても、才媛ばかり自分のものにしたは良いが、近衛兵長ともあろう私が、何でこんなにびくびくしなければならぬのか・・・)

ここで私は、つくづく思った。

(この屈強そうな軍人さんは、こんな事ばかり考えているのか?・・・)

やがて、バビロンの巨塔が見えてきた。それぞれの段に輝く燈火と月明かりで、全体像が浮かび上がって見える。

(昼間は巨大さが目立ったが、夜は壮麗さが目立っている。

夜は灯台の様に、遙か遠方からその姿を望むことが出来るのだろう。

人間の造物として、これ程大きく壮麗なものを何の目的で造ったのか?・・・)

更に300程歩くと、大きな神殿が見えてきた。

陰の方で、十人ほどの女性がベールで顔を隠し、男を誘っているのである。昼間は見えなかったが、日が暮れると何処からともなく集まって来るらしい。

彼は、心の中でぶつぶつ言っている様子だった。

(バビロンに平和が蘇えるにつれ遊女の数も多くなった・・・最近はこちらの神殿前でたむろしている・・・余り増大する様だと王も何らかの手を打つかも知れない・・・)

彼は、巨大な南城へ入って行った。

そして、王宮役人の部屋からエバを誘い出した。

普段行く川辺とは異なった川辺に連れてくると、屋形船の籠の中に入り、入り口の扉を閉めた・・・

ここで、1時間、時を進めますという声が聞こえた。

少し残念な気持ちも有ったが、見せる内容を決める権限を持つのはアミーだった。

アミー氏は言った。

「彼は、意外と人生の事柄を考えています。彼が考えている事に意識を集中して下さい・・・」

(・・・今日の満足は完全だった・・・しかし、満足が完全であればある程、ある感情が湧いてくるのだ・・・もっと別の人生の目的があるやも知れない、とでも言うべき事か・・・しかし、私はそれ程高尚な人間ではない・・・信心深くもない・・・私には、人が羨む地位がある、金も、類まれな女性を思い通りにする事も出来る。そして、若く頑強な肉体!・・・一体何が不足だと言うのか・・・私が道を行く時、多くの民が恐れと憧れの念を持って私を見る・・・しかし、満足がどれ程完全であっても、やはりあの感情は湧いてくる。生活の雑事に心奪われている時は、その欲望を成す事を人生の目的にしている為、逆に気付かないという事か?・・・

私にはよく解らない・・・そうだ、あのナオミに聞いてみよう。彼女ならいい答えを出してくれるかも知れない。）

ここで、アミーは言った。

「・・・時間は、あと30分あります。何とかもう一遍ご覧頂けるでしょう。」

「・・・バビロンとはお別れですか・・・少し残念ですが・・・あの、当事者型三次元テレビは迫力が有り過ぎて、どうも私には刺激が強過ぎるようです・・・普通の三次元テレビで十分なのですが・・・」

三次元テレビは、臨場感が有り過ぎて私にとっておちおち眺めていられないのである。

こうして、普通の三次元テレビが続行される事となった・・・。

5、ベツレヘム編

アミーは言った。

「次の画面は、約2000年前のベツレヘムのカルメル山周辺の画面です。」

・・・やがて、小鳥のさえずりが聞こえ始め、木漏れ日の様な光が差し込んできた・・・。

上を見ると、粗末な天井が見え、隙間が沢山あり日の光がちらちらと差し込んでいる。

左右を見渡して観た・・・。

大きな隙間から野原が見える。ここは、あばら家の中の様である。

遠くに40～50頭の羊がおり、若い男二人が羊たちを移動させようとしていた。下を見ると、一人の若者がすやすやと寝ている。

外の一人がヘブライ語で叫んだ。

「おい！いつまで寝ているんだ！さっさと手伝え！・・・」

中の男はぱっと目を開けて、こう言った。

「すまない、すっかり寝過ごしてしまった。疲れが溜まっていたんだろう・・・」

と言いながら、慌てて向こうへ走り寄って行った。

一人がこう言った。

「この山の向こうにも良い牧草地がありそうだ・・・あの辺りに小さな神殿が見える・・・あそこまで行ってみよう。」

場面が変わって、彼らは神殿近くの林までやって来た。

その神殿は簡素な作りで、4m程の高さの緩い階段が二か所あった。

朝日は姿を現し、階段はその日差しを一面に浴びていた。

この神殿は簡素な作りで、観たところ神への祈りを捧げる目的の為だけに作られたようだ。

彼らがその場にやって来てから少し経つと、神殿の裏手の方から、白いローブを纏った12人の少女達が、香を持ってその階段の前までやって来た。12歳から15歳位の少女ばかりであった。

彼ら3人は、慌てて木陰に隠れ、じっと様子を覗いている……。

そうすると、12歳か13歳の美しい乙女を先頭に、皆が階段を上り始めた……。

その少女だけが、右側の階段を上って行った……。

娘たちは皆朝日に包まれ金色に輝いて、絵の様に美しい光景に牧童達も私も思わず息を呑んだ。

皆が黄金の衣装を纏っている様であった。

先頭の乙女が最上段に達した時、晴れ渡った朝にも拘らず、突然、稲妻と雷が発生した。

そして、大天使が赤子を抱えて上空に現れたのである……。

牧童らは腰が抜けんばかりに驚き、皆の膝はがくがくと震えていた。

(！？……これは一体……SFなんだろうか？……)

天使は、驚きが治まらない先頭の少女を祭壇の前に導き、何か言葉を発した……。

その少女は、何かを悟った様にその前に跪いて祈った……。

やがて天使が消えると、乙女らは吉報を受け取ったかの様に喜び勇んで、神殿の裏へと消えて行った……。

彼らはしばらくの間動くことが出来ず、呆然と突っ立っていた。

(今のは現実だったのだろうか？一体、何を意味したのだろうか？……)

三次元TVの場面は1か月単位で進められ、事あるごとに彼らとその時の事を話し合う様子が映し出された。

やがて冬の画面となり、彼らは死海やベツレヘムの方へ行き、夏になると、又カルメル山の方へやって来た。

彼らは、名の無い牧童達だった。

時間はどんどん飛ばされ、あれから3年目の冬を迎えた。

彼らはその冬のある日、ベツレヘムの丘に羊を集めていた。

彼らは、今日ここに泊まることになるだろう。

先だって、ローマの提督がこういうお触れを出す場面が映し出されていた。それは、生まれた土地にユダヤ人を登録するのでその地に帰郷せよ、というものだった。

その為、その日は、登録するために自分の故郷まで旅をする人々で丘の下の道々は溢れていた。

画面が夕方に進められた時、彼らの一人がこう言った。

「丘の下の宿屋街に行こう……あの辺りに酒場が有った筈だ。たまに憂さ晴らしを

しなければ身が持たん。」

彼らは丘を下り始めていた・・・。日は沈みかかっていた。

丘の麓に馬小屋が一軒あった。

これを見て、一人が冗談半分にこう言った。

「今日の人出なら宿は皆満員だろう・・・この馬小屋位しか泊る所は無いかも知れない・・・」

眼に入る4軒の宿のうち、最初の宿の傍までやって来た。

入り口から何人かの人々が出てきた。

「仕方ない・・・野宿するか・・・」等と言っている。

向こう側の大きな宿の方を見ると、窓々から人々が顔を出し、皆、玄関の方を見ている・・・。窓の周囲にいる人々も皆、入り口を注視している。

何事かと思いきや、臨月を迎えた16歳位の美しい少女と三十代後半と思われる男が立っている・・・。

男は、何とか一部屋空きはないですかと言っているのだが、宿屋の主人は、全く空きは無いとつれない返事である。

宿屋の主人の妻と娘は、気の毒そうに見ている。

人々は、夫婦かどうかよく判らない組み合わせの不自然さと、幼児がもしその宿で誕生すれば、旅の一つの話題ができると考えて、注目している様なのだ。

しかし、牧童らの目も私の目も、うつ向いているその少女の横画に吸い込まれた・・・。

(この少女は、一度見たことがある・・・あの時の乙女ではないか?・・・)

宿屋の主人のつれない返事があったそのすぐ後、宿の窓から顔を出していた人々のうち何人かが玄関から出てきた。

そして、表にいた人々の中から数人が二人の傍まで行き、一緒に旅探しを始めた・・・。

(興味本位の見物人以外に、何らかの繋がりを持つ人々がいるのだろうか?・・・)

彼らは、丘の方へ向かって歩き始めた・・・。

そして、牧童達とすれ違う事となった。

牧童らは、思わず少女を注視した・・・。

(間違いない!あの神聖な感じ・・・その前では邪悪な思考が消え去ってしまう様な乙女だ。)

牧童らの一人が、付き添いの一人を捕まえてこう質問した。

「あの少女をカルメル山で一度見たことがあるのだが・・・」

相手の男性は答えた。

「階段での選別も、無原罪の懐胎によって生まれる救世主の事も、我々はすべて知っています。」と言って、去って行った。

牧童ら3人は、無言のまま酒場へ入った・・・。

彼らは中に入っても殆ど喋る事が出来なかった。

何か経験した事もない大変な事が起きそうだと感じ始めていた。

隣の酒飲みが、こう言った。

「あんたら、例の二人見ただろう・・・最近話で聞いた白色組織とかいうグループの一員ではないか？・・・やがて、救世主が生まれるという話を彼らから聞いた事がある・・・まさか、あの乙女が・・・その？」

益々牧童らの心は、ざわついてきた。

酒を飲む気分では無くなってきた・・・。

彼らも他の皆もある疑問に取りつかれ、この近辺全てが奇妙な静けさに包まれていた。

その疑問とは、あの神秘的とはいえ15歳～16歳の少女と、貧しそうな中年の男性に神が救世主を委ねるのだろうか？というものだった。

しかし、何らかの異変が起きる胸騒ぎがして、彼らはそそくさと酒場を出た。

辺りは、すでにどっぷりと闇に漬かっていた。

灯りといえば、ベツレヘムの町や酒場からのランプの灯りがちらちらと見えるだけである。

彼らは無言で、丘の方を目指して歩き始めた・・・。

しばらく歩くと、丘の麓までやって来た。

あの馬小屋に灯りが灯っているではないか・・・。

一人が言った。

「馬小屋に泊まるのはさすがにどうかと思っていたら、泊まる人がいたのか・・・」

やがて丘の上に着いた彼らは、黙って横になった。

少し冷える夜だったが、いつの間にかうつらうつらとし始めた。

(に平安を・・・義ある人に・・・を・・・)

突然、天から神聖な歌声が聞こえて来た・・・。

(地上に平安を・・・義ある人に御心を・・・)

天に明るい星々が現われ、他の羊飼達も皆立ち上がって天を仰いでいる。

その星の中から、一際明るい星が現われ、夜空全体を照らさんばかりに輝いた。

ベツレヘム全体が、聖なる振動に満たされていく様に感じた。

信心深い羊飼いは、今までとは違った時代がやって来る事を感じ、涙を流して祈っている。

丘の下から、微かに産声が聞こえて来た・・・。

信心深い者らは、弾かれたように下へ駆けていった。

そうでない彼らも、顔を見合わせると、一目散にあの馬小屋目がけて駆けて行った・・・。

既に何人かの羊飼いらが覗いていた・・・。

彼らも覗いている間から覗いて見てみた・・・。

嬰兒は、桶に浸かった後なのだろう、白い着物を着せられたばかりのところで、助産婦が抱いていた。

あの宿屋の娘と母親も中に入っている。

娘は、嬰兒の母となった乙女と助産婦に何かを頼んでいる・・・。

乙女が微笑んだので、許しが出たようだ。

助産婦は、嬰兒を娘に渡した。

娘は、嬰兒を抱くと感激の涙を流し、その額に口づけをした。

神聖な振動がみなぎり、我々はただうっとりしていた。

「多くの天使達がやって来ている・・・」

覗いている牧童の一人が呟いた。

彼ら3人には見えず、キョロキョロ辺りを見回している・・・。

敬虔な信者には、その姿が見えるというのである。

皆が、この世の嫌なこと全てを忘れ去っている様だった。

今までの自分とは違った人間に成った様な気がするのか、彼らはさっぱりとした顔をしている。

彼らはその思いを嘔みしめながら、やがて、丘の上へゆっくりと歩いて行った・・・。

そして、静かに新時代の第一夜の眠りについたのである。

次の日は、皆早く目覚めた。

彼らは我慢が出来ず馬小屋の方へ行ってみた・・・。

既に多くの人々が御子を拝みにやって来ており、あらゆる援助が為されようとしていた。

私はここで考えた。

(神とは何なのだ？・・・奇跡とは？・・・現にこうして何度も起きているのだ。)

彼ら3人は言い合った。「御子がここに居る間、我々もここに居よう。」

馬小屋の周りにいる人々の中に、三人のうちの一人と昨晚話を交した

或る組織の人物と思われる若い男の姿があった。

彼の元へ行き、三人のうちの一人がこう尋ねた。

「あの御子はいつまで留まるのだろうか？」

「清めの期間が終わる迄だ、割礼を施し、組織の神殿へ連れて行くのだ・・・」

御子らがいよいよこの地を去ってエルサレムの神殿へ向かう時、牧童らは最後尾をつけて行った・・・。

通る道々は、エルサレムへ向かう人々で騒がしかった。

神殿の前まで行くと、やや高齢の女性の大神官が、喜びを持って一行を迎えた。

指導者の長が女性だとは、意外だった。

皆、ジュディ様、ジュディ様と呼んでいる。

喜びに満ちた表情で、彼女が口を開いた。

「神の預言が現わされた、明日は導きの星、占星術の星に拠り、三賢人がやって来る。」

牧童らは、羊をそのまま置いてきた為、神殿からかなり離れたベツレヘムの丘まで戻り、そこで眠った。

翌朝の画面では、何頭かの羊が居なくなっていたが、今はそれどころではない様子だった。

また神殿の側まで行くと、じっと待った・・・。

そこで画面の時間が昼過ぎに飛ばされた。

・・・やがて三人の賢人が、示し合わせたように一緒にやって来た。

エジプト人、ペルシャ人、それにインド人である。

彼らは、神殿に入ると、日が暮れ掛ってもまだ出てこなかった。

次は画面が夜に進められると、6人の小間使いが出てきた。

あの若者が居たので、牧童の一人が訊いてみた。

「三人は、如何したのだろうか・・・」

「彼らとジュディ様の話がまとまった。明日、賢人らがヘロデ王の下へ御子の報告を為すことに決まった・・・御子らはナザレへ帰る。」

「なぜ？・・・一番の権力者であるローマ総督の下へ行くのではないか？」

彼は、笑いながら答えた。

「ヘロデ王の元へ行けば、あの評判の悪い王とローマ人の間にいざこざが起きるだろう・・・そして、我々白色組織の活動に注意が喚起されるだろう。」

牧童らは、御子と乙女に今一度会いたかった様だが、思いを果たせぬまますごすごとあの丘に帰って行った・・・。

この彼らの姿を見ながら、画面は消去された・・・。

私は、考えた。

(一連の出来事は、何を意味するのだろうか？・・・奇跡とは何故起るのだろうか？・・・あの乙女の顔・・・二年半前にカルメル山で見たのが最初だったのか？それ以前に何かで見た顔だ・・・そうだ、絵画で観たんだ！・・・しかし・・・)

中世の或る絵のマリアが、驚くほど似ていたのである。

(描いた時代は、1000年以上後の時代の筈だが・・・)

その他、天からの音楽や天使の事、白色組織の事、救世主の事・・・。

多くの事柄は、私の頭の中を混乱させた。

ここでアミーは言った。

「人間の本质は余り変わらないでしょう・・・2600年前のバビロニアも、2000年

前のユダヤも・・・」

「ええ、全く・・・しかし・・・とにかく、伝説が実際だったなんて・・・頭は混乱しています。」

「今日は、三時間で多くの事柄を見せすぎたかも知れません。家までお送りしますので、今日はゆっくりお休み下さい・・・事柄が貴方の内部に消化された頃に、更に、次をお見せ致しましょう。」

吸引ビームのある円盤の中央の部屋へ共に歩きながら、彼は、私の精神が受けた衝撃を量っている様だった。

「食べたものは、直ぐには消化されません。戻ったら、ゆっくり考えてみて下さい・・・ただ、人類の異変の時は、徐々に近づいて来ていますので、またお会いしましょう・・・」

(・・・とてつもなく時間が過ぎたように感じる・・・三時間でなく、三年か・・・三〇年にも・・・)

「中央へどうぞ・・・」

早くも彼の声が聞こえた。

(もう家の前にやって来たのか・・・犬の不思議そうな表情を見る事が出来るな・・・)

静かに開いた中央部からは、近所の家々の灯りが瞬いていた。

「もう時間が来ました。貴方の精神も混乱しているでしょう・・・一度に多くの経験をされたので・・・」

「あ、ハイ・・・」

驚くような体験ばかりだった。

生まれてこのかた初めての経験・・・心躍る気持ちと混乱と不安と、そして、・・・余りに進みすぎた科学と精神性に嘆息し、今の地球がこのように進化する日は余りに先であらうという絶望感も生じた。

これが最後であろうか？という惜別感も生じてきた。

「素晴らしくも信じがたい体験でした・・・あの、これが最後なのでしょうか？」

「先ほど精神の同調という話が出ましたね。貴方は気づいていませんが、我々は、理解者に成れる者、その可能性の或る者を選んでお見せしているのです。」

彼は微笑んで、最後にこう言った。

「ご安心下さい。貴方の心と生活が一段落したら、又色々なものをお見せしましょう・・・」

ここで、吸引ビームの下に立つように指示された。

私の体は一度空中に保持され、足元の床が二メートル四方ほど開いた。

吸引力が少し弱められたと感じた途端、私の体はスルスルと下降を始めた。

・・・円盤の高度は、十メートル余りのようだった。下降の途中、首が左右に振

れるだけ振れる範囲を見回して見たが、目撃者は、私の飼い犬だけのようだ。
余りに特異な体験の為か、吠えることを忘れてしまった様だ。
怯えるべきか驚くべきか度肝を抜かれたような表情をしているのである。
この時、私の心の中には、日蓮上人を上空から眺めた時の取り巻きの人々の様々な表情が、有り有りとは浮かんでいた。